



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ダビデの町の発掘調査」(その後)
Author(s)	山崎, 保興
Citation	基督教学, 24, 37-40
Issue Date	1989-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46476
Type	journal article
File Information	24_37-40.pdf



「ダビデの町の発掘調査」(その後)

山崎 保興

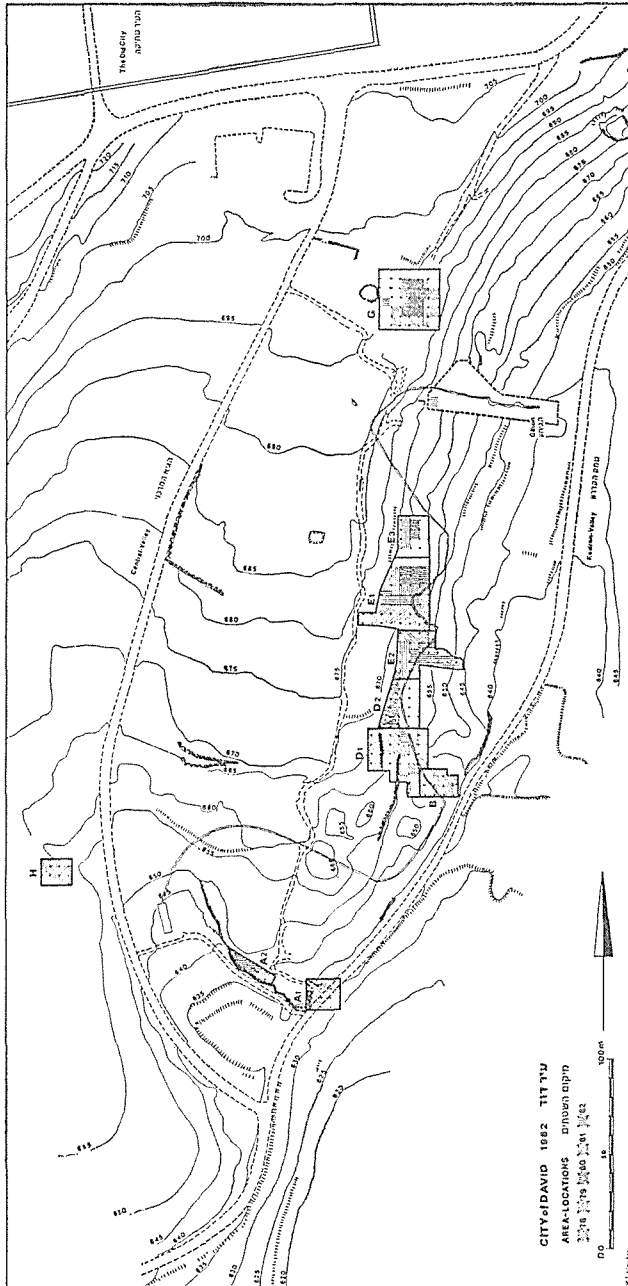
先に本誌第十三号において「エルサレムの発掘」についての歴史的概観を行い、続いて本学会の第十七回大会において「エルサレムの変遷」と題する発表を行った際にも、主として「ダビデの町」の過去の発掘成果を中心的関心事とした。その後現地の考古学研究所による初めての発掘調査が開始されるに及び二度にわたって現場を見学し、その時の見聞を手がかりとしつつ第十八回大会並びに本誌第十四号において「ダビデの町再考」と称する報告を行ったのであるが、その後しばらく本学会の圈外に去ったことと、併せて職務上の事情もあって久しくこのテーマから離れていた。ところが一昨一九八九年秋、現場における発掘調査の中心的責任者であったイーガル・シロ教授の急逝のことを、大分おかれて現地の新聞で知ることがあり、俄かに再びその後の経過について

の関心を強めて情報入手につとめていたが、昨年始め漸くシロ教授自身の正式報告書(それ自体未だ中間報告に過ぎないが)を見ることが出来、早速第二十七大会においてその消息の一端を報告紹介することにした。掲題に(その後)と付記したのは以上の次第からである。

イスラエル人による最初の「ダビデの町」発掘調査は、一九七八年から一九八二年にかけて、イスラエル発掘協会・イスラエル考古局・ヘブライ大学考古研究所の協力により、同研究所イーガル・シロの指揮下に、全シーズンを通して行われた。作業範囲は「ダビデの町」と呼ばれる丘陵地帯のほぼ全域にわたっているが、シロ教授はここに $A_1 \cdot A_2 \cdot B \cdot D_1 \cdot D_2 \cdot E_1 \cdot E_2 \cdot E_3 \cdot G \cdot H \cdot J$ の各重点地区を指定し、一九七八年のシーズン幕明けと同時に先ずG地区から作業を開始した。隣接J地区はギホンの泉からシロアムの池に抜ける地下水路の東西線部分をカバーしており、いわゆる「ウォレンの縦穴」として前世紀以来すでによく知られて来たものをシロは徹底的に再調査したのであるが、G地区はほぼその直上部分北寄りの、広さ四七五平方メートルの正方形地域であり、この部分もまた今世紀初頭のマカリスター及びダンカン、また六十年代から七十年代にかけてのケニヨンの発掘調査に

よって早くから注目を集めて来た地域である。シロはこの地区についても在来以上に徹底的に調査のメスを入れ、その結果前期諸先達の、殊にケニヨン女史の画期的成果として評価されて来た幾つかの点についてもその誤

謬を指摘せねばならない程の大きな成果を得た模様である。もちろん他の地区においても、その多くはまだ一度も掘られたことのない地域であっただけに尚更その調査結果も豊かな成果をもたらしたに違いないのであるが、



● Excavation Areas in the City of David, 1978-82

シロ教授自身最も関心を集中したのはやはりG地区であったように思われるので、ここでも同地区に関する調査結果に限って、その成果の一部分を紹介することにした。

さて、全地域を通じ層位は二十一層に分けられるが、大部分は第十四層から第五層の間に集中、即ち鉄器時代初期からローマ時代にかけてであり、同時にまたそれらの地区は丘陵東側斜面中央部に連続的に隣接する。この内最も古い層から最も新しい層まで多層にわたっているのはE地区であり、それに次いでG地区がある。G地区の層位は最深部は第十六層、表面部が第三層である。即ち時代的には後期青銅器時代からビサンチン時代にわたる。元来この地域は「ダビデの町」の頂上部分に当り、いわゆる「ソロモンのアクロポリス」にも最も近接した地点であるので、早くから考古学者たちの注目を集めていた。一九二六年マカリスト、一九二九年クラウフツト、そして一九七四年に終了したケニヨンによる発掘調査は、ほぼその全容を明らかにし、この地域の重要性を示すことに貢献していたので、シロもまたここから作業を開始したものと思われる。彼は既にケニヨンによって頂上城壁基部に発見されていた住居跡を中心に、主とし

て城壁中央部足下を急速に掘り下げて行ったところ、その最初のシーズンに予想外の状況が現出した。即ち在来地表にあらわれていて、ケニヨンによって紀元前二ないし一世紀のものと判定されていた城壁中央階段状建造物の足下が、どこまでも深く延びる傾斜防壁につながっていることが分って来たのである。結果的には一九八〇年の段階において、上下全長五〇フィートにも及ぶ長大な防壁斜面が、かつてケニヨンによって発見された旧エブス防壁線にまで達していることが判明した。この間の出土品からの推定によって、この防壁は紀元前十ないし九世紀、即ちダビデ・ソロモン時代のものであり、正しく「ダビデの町」初期の防壁線を示していることになる。その結果、既にケニヨンによってソロモンの建造物として列王記にも出てくる「ミロ」と同定されていた丘陵東側斜面下部の階段状建造物については改めて疑問が提出されることになるわけであるが、シロは明らかにこれは「ミロ」ではない、と断定しており、在来ケニヨン説を前提として「ダビデの町」の形状をとらえて来たわれわれにとっても、今後の作業路線に少なからぬ影響をもたらすものとして重要な発見であると思われる。

前記住居跡も明らかにその全貌をあらわした。既にシ

ロがその師イガエル・ヤディン教授と共にメギドやハズルで発見したものと全く同じタイプの典型的イスラエル家屋であり、出土した銘文から「アヒエルの家」と命名され、紀元前七世紀ないし六世紀、即ち王国時代末期のものとして推定された。同じ層の少し北寄りの部分に焼けこげの残る住居跡があり、これは明かにネブカドネザルによるエルサレム攻略の痕跡であることは衆目の一致するところであるが、先にケニオンが前記「アヒエルの家」とその周辺の建造物も含めて、全体としてバビロニヤ破壊跡とする考えは、これまたシロによって修正されることになった。「アヒエルの家」の上部には、これまたかつてケニオンによって出土した古い並行墨壁が見えるのであるが、ケニオンが紀元前十四ないし十三世紀のものと判定していたのを、シロはより厳密に十三世紀以前には遡及できないとする。以上、主としてケニオン説の否定ないし修正にかかわる事例を幾つか取り上げてみたのであるが、およそケニオンの預り知ることの出来ない類いの新発見も少くない。定められた紙数も尽きようとしているので、ほんのその一端を紹介するに留めるが、例えばE₁地区から出土した素焼きの破片群から南アラビア式銘文とアラビア人名の刻み込まれたものが発見され

た。出土層は第十層、即ち前記住居群と同じ王国時代末期に属する。このことは、崩壊直前の南ユダ王国と紅海沿岸ないし南アラビアの諸都市との間に一定の文化交流が行われていたことを物語るものとして極めて重要視されている。いまその政治・経済・文化地理的背景を総覧して事の重要性を浮き彫りにする、というような作業にはまだ及ばないが、ソロモン時代の状況と思ひ合せて甚だ興味深々たるものがあるように思われる。

さて、総じてこの種の作業は、専門の考古学者にとつてはその作業過程のひとつま、ひとつまが既に十分に学問的興味と充実感をもたらすもののようであるが、元来思想的に旧約的事態をとらえることを意図するわれわれにとっては、その成果が如何なる意味をもち、如何なる意義と価値をわれわれにもたらすものであるかを見きわめることこそ肝要と思われるのであるが、その点に關しては未だ全くその構造の全容は土に掩われたままであることを付記して、この拙い報告を終りたい。

参考文献

- Yigal Shilo: Excavation at the City of David. I.
(QEDDEM 19, Monograph of the Institute of Archaeology, 1984 Jerusalem)